平成 28 年度大島賞選考結果報告

褒賞選考委員会
委員長　内 田 俊 也

大島賞は，若手研究者を対象に，将来，本邦の腎臓学研究のリーダーたりうる人材を顕彰することを目的に設けられており，毎年 2 名の 42 歳未満の研究者に授与されている。平成 27 年度の大島賞選考委員会は　平成 27 年 10 月 17 日に行われた。今年度は 4 名の候補者の推薦があり，いずれも本賞の趣旨に合致し，研究業績もきわめて質が高いものであった。褒章選考委員会では，候補者の研究業績の質と広がり，および将来性などについて多岐にわたる熟議が行われ，以下の 2 名が大島賞に値するものとして推薦し，平成 27 年 11 月 29 日の理事会において承認された。

星野純一氏　　虎の門病院腎センター
研究主題「難治性腎疾患への挑戦と臨床研究の推進」

星野氏は 1997 年に横浜市立大学医学部を卒業後，一貫して虎の門病院で臨床の最前線に従事し，豊富な臨床経験をもとに，臨床医が避けて通ることができない様々な難治性疾患に対して真摯に取り組んできた。これまで有効な治療法が存在しなかった巨大多発性囊胞腎・囊胞肝に対し，動脈塞栓術を中心とした革新的な新規治療法の開発の発展に中心的な役割を果たし，科学的にその有用性を証明してきた。また末期腎不全の最大の原因である糖尿病性腎症に対し，腎病理所見の臨床的意義や血糖管理に関する新たな知見を見出した。さらに IgA 腎症，腎アミロイドーシスや重症下肢虚血など腎臓医が遭遇する多数の難治性疾患に対する研究を行い，その成果を国際一流誌に積極的に発信してきた。

また星野氏は，臨床研究の更なる向上のために米国 UCLA 公衆衛生大学院にて疫学の学位を取得し，帰国後は AMED 研究を含めた多くの臨床研究の場において複数の国内多施設コホートの立案作成に取り組み，国際的に活躍の場を広げてきた。質の高い臨床研究や患者本位のエビデンスが社会的に求められている。実際，臨床研究を立案実行・解析し，国際的に発信できる能力を持った人材の必要性はきわめて高い。今後の腎臓病学の発展のためには，基礎のみならず臨床においても，豊富な臨床経験と質の高い疫学統計知識を持った若手医師の育成が欠かせないと思われる。

星野氏の執筆した多くの英語論文は臨床研究を遂行する能力を十分に示すもので，さらに積極的な若手教育の実践や，多施設研究で重要な共同研究者としての献身的な姿勢を表している。過去の実績，現在の活動姿勢，若手教育への熱意，周囲から信頼，いずれをとっても次世代のリーダーとして腎臓学を牽引していくことが大いに期待できる人材であり，ここに大島賞に値すると評価された。

山本　卓氏　新潟大学医歯学総合病院
研究主題「尿毒症物質に着目した慢性腎臓病関連疾患の病態解明と治療」

山本　卓氏は 1998 年に新潟大学医学部を卒業し内科研修の後，腎臓専門医として診療・教育に従事するかたわら，尿毒症物質に着目した慢性腎臓病（CKD）の病態，とくに透析関連アミロイドーシスと心血管系疾患について基礎研究および臨床研究を行ってきた。2008 年から 3 年間バンダービルト大学小児科に留学し研究水準を高めた。初期の業績としては，極度な酸性 pH でのみ観察されていた試験管内 β2 ミクログロブリン重合による線維形成反応を，中性 pH の環境で可能にしたことであり，より生理的条件での実験

系は，のちにさまざまな生体分子との相互作用を調べる際に応用された。さらに，CKD で動脈硬化が増悪する機序の解明，蛋白結合尿毒素の一つであるインドキシル硫酸が増加する意義など多くの研究業績をあげた。さらに，経口吸着炭薬を維持血液透析患者に使用する介入研究を行い，インドキシル硫酸をはじめとする多種の血中蛋白結合尿毒素を減少させることが可能であることを示した。現在，CKD 患者の脂質機能と動脈硬化機序のより詳細な解明と，現行の透析療法では不十分な蛋白結合尿毒素の除去効率を向上させる血液浄化療法の開発に取り組んでおり，多くの若手研究者の研究指導にも貢献している。

このように，山本氏は一貫して尿毒症物質に着目した CKD 関連疾患の病態解明と治療に関する基礎的・臨床的な研究を着実に進め，それらの成果を多数の論文と国内外の学会で報告してきた。同氏の研究成果と今後の取り組みは，腎臓病で生じる多彩な病態の解明，治療法の開発とともに，腎臓学会の発展にも大きく寄与することが期待される。以上から，山本　卓氏は過去の実績，現在の活動姿勢，若手教育への熱意，周囲から信頼，いずれをとっても次世代のリーダーとして腎臓学を牽引していくことが大いに期待できる人材であり，ここに大島賞に値すると評価された。